

## 京都大学野生動物研究センター発足の記者会見用資料

### 2008年3月18日記者会見（メディアへの説明概要）

京都大学は、その憲章において、学問を通じて「地球社会の調和ある共存」に貢献することを明記している。このたび、京都大学は、2008年4月に、京都大学野生動物研究センターを発足させることを決定した。

2001年にヒトゲノムが解読され、2005年にはチンパンジーゲノムが解読された。同年2005年に、じつはイネの全ゲノムも解読されている。DNAの塩基配列によって構成されているという意味で、人間もチンパンジーもイネも変わりがない。21世紀の初頭に、人間がチンパンジーと近縁なだけではなく、さらには他の動物や、イネや桜の木までも、いのちがつながっていることがわかった。「人間と動物」という二分法はもはや成り立たない。人間は動物であり、人間とそれ以外の動物がこの地球で共存している。同様に、人間と自然を対置するのも変だ。人間はまぎれもなく自然の一部である。人間を含めた自然のまるごと全体を深く理解し、人間とそれ以外の生命の連続性を実感し理解することが、現代社会の直面するさまざまな問題に対する科学的に妥当な指針を与えるだろう。

京都大学は「探検大学」と呼ばれてきた。人間を含めた自然全体を学問の対象としたフィールドワークの伝統がある。現場に立脚した科学である。自分の足で歩き回り、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じたもの、そうした野外の経験を基盤に学問してきた。本年2008年は、京都大学のフィールドワークにとって記念すべき年である。50年前の1958年に、今西錦司と伊谷純一郎が最初のアフリカ探検をおこなった。アフリカの熱帯林にすむ野生チンパンジーとゴリラを対象にした人間の社会的進化的起源をさぐる研究である。その後の50年にわたって、京都大学の研究者はチンパンジーやゴリラのみならず狩猟採集民や遊牧民や農耕民の生態人類学的な調査を展開してきた。

また同じ1958年に、西堀栄三郎を隊長とする南極越冬隊が、初めて極寒の地での越冬観測に成功した。さらに同年、フランス文学者の桑原武夫を隊長とする京都大学学士山岳会の遠征隊が、カラコルムのチョゴリザ峰（7665m）に初登頂した。ネパールヒマラヤのマナスル峰登頂について、単独大学の登山隊がカラコルムヒマラヤの処女峰の頂に達した。アフリカの今西、南極の西堀、ヒマラヤの桑原は、京都大学の同期生（一中、三高）である。

「京都学派」という言葉は西田幾多郎・田辺元らの哲学の系譜をさすが、京都学派はじつはさまざまな学問分野にある。桑原をはじめ梅棹から梅原猛といった人文科学の伝統もあれば、昨年生誕百年を祝った湯川秀樹・朝永振一郎の両ノーベル賞学者に発する理論物理学の系譜もある。同様に、フィールドワークの伝統は、今西・西堀・桑原の時代から50年にわたって連綿と受け継がれ、遺伝学の木原均、霊長類学の今西錦司、仏文学の桑原武夫、文化人類学の梅棹忠夫らの文化勲章受賞者を輩出した。こうした人類学・霊長類学・動物学のみならず、「フィールドワークを基礎とする実証的な科学のスタイル」は、他の大学の追隨を許さない京都大学のひとつの個性だといえる。

人間とそれ以外の動物の関係を考えるうえで、かれらの自然の生息地での生態を研究することは、きわめて重要である。チンパンジーやボノボやゴリラの野生の研究において、日本の研究は世界の最前線をいっている。しかし、ゾウや、トラや、サイや、クジラなど、その他のアンブレラ種（生態系のシンボルとなるような大型の野生動物）についての研究は、必ずしも進んでいない。国際的な連携のなかで、日本がその動物学的研究の歴史と立場を活かしたユニークな貢献が求められている。京都大学野生動物研究センターは、「絶滅の危機に瀕した野生動物」を研究対象にすることによって、日本固有の課題であるサル・シカ・クマといった身の回りの野生動物ではなく、さらに国際的な規模で保全を必要とするような種（すなわち動物園で見かけるが、自然の生息地での存続が著しく脅かされている種）を研究の主対象としている。

野生動物研究センターは、京都大学が培ってきた歴史と伝統と人材を活かし、大学としての個性を輝かせる新たな学問、「野生動物保全学」「動物園科学」「自然学」などの創生をめざしている。

## 野生動物研究センターの教員リスト（19名）

2008年3月18日版

野生動物研究センターの専任教員（有給） 10名

職階	氏名	年齢	現職	博士学位	専門分野と主要な対象動物
教授	伊谷原一	50	林原類人猿研究所所長	京大理博	動物園科学、ボノボ
教授	幸島司郎	52	東工大准教授	京大理博	動物行動学、イルカ・サイ
教授	村山美穂	43	岐阜大准教授	京大理博	ゲノム科学、家禽
准教授	杉浦秀樹	40	京大霊長類研究所助教	東大理博	保全生物学、ニホンザル
准教授	田中正之	39	京大霊長類研究所助教	京大理博	比較認知科学、チンパンジー
准教授	中村美知夫	36	京大理学研究科助教	京大理博	保全生物学、チンパンジー
准教授	タチアナ・ハムル	33	京大霊長類研究所准教授	スタンフォード大 PhD	保全生物学、マーモセット
准教授	中村美穂	46	映像プロデューサー	東大学士	映像動物学、霊長類、コウノトリ
助教	森村成樹	37	福祉長寿研究部門助教	京大理博	動物福祉学、チンパンジー
助教	藤澤道子	40	福祉長寿研究部門助教	高知医大医博	健康長寿科学、人間

上からの7名が、いわゆる狭義の専任定員教員

下の3名は寄附講座（チンパンジー・サンクチュアリ・宇土）の時間雇用・特定有期雇用教員  
なお、タチアナ・ハムルは外国人客員教員の定員ポストで平成19年7月からの2年任期。

野生動物研究センターの兼任教員(順不同)、9名

職階	氏名	年齢	現職	学位	専門分野
教授	渡辺邦夫	60	京大霊長類研究所教授	京大理博	保全生物学、インドネシアの動物相
教授	長谷川博	59	東邦大学理学部教授	京大理修	保全生物学、アホウドリ
教授	松林公蔵	58	京大東南アジア研究所教授	京大医博	健康長寿科学、人間
教授	松沢哲郎	57	京大霊長類研究所教授	京大理博	比較認知科学、チンパンジー
教授	山極寿一	55	京大理学研究科動物学教授	京大理博	人類進化科学、ゴリラ
教授	長谷川寿一	54	東大総合文化研究科教授	東大文博	進化生物学、ゾウ、クジャク
教授	遠藤秀紀	42	東大総合博物館教授	東大農博	動物園科学、哺乳類全般
准教授	友永雅己	44	京大霊長類研究所准教授	京大理博	動物福祉学、チンパンジー
准教授	半谷吾郎	33	京大霊長類研究所准教授	京大理博	保全生物学、ボルネオの霊長類
准教授	平田聡	35	林原類人猿研究所研究員	京大理博	比較認知科学、チンパンジー

上の9名は無報酬兼業の教員である。

京都大学野生動物研究センターの所在地： 京都市吉田地区（工学部1号館と学生支援機構）

野生動物研究センターに直属する3施設

- 1) 宮崎県、幸島観察所、イモ洗いで有名な野生ニホンザルのいる天然記念物の島に施設と職員
- 2) 鹿児島県、屋久島観察所、ヤクザルやヤクシカで有名な世界自然遺産の島に施設
- 3) 熊本県、チンパンジー・サンクチュアリ・宇土（株式会社三和化学研究所のチンパンジー）

野生動物研究センターと当初連携する機関：

京都市動物園、名古屋市東山動物園、林原類人猿研究センター、以上の日本動物園水族館加盟館

## 総論：動物園と大学との連携

大学は、人間を含めた自然全体について学問し、とくに動物学や植物学をはじめ生物・生命・進化に関する先端研究や、自然のなかで人間のあるべき姿を考える人文学や社会科学の蓄積がある。教育基本法で、大学の使命は研究・教育のみならず社会貢献と定められている。一方、動物園は、法令上、博物館である。動物園は「自然への窓」であり環境教育の重要な場である。しかし日本と欧米の動物園の大きな違いとして、日本の動物園には博士学位をもった研究者がきわめて少ない。欧米の動物園ではキュレーターとカリサーチフェロウと呼ばれる博士学位取得者の専門的な職種が確立している。それに対して日本では、動物園の職員は基本的に獣医師と飼育員と事務職員しかいない。大学は、その所在地の動物園と連携し、博物館の使命である社会教育としての機能に深く関与し貢献すべきだろう。そうした相互認識を土台に、以下に、大学と動物園の双方向の寄与について項目を列挙する。

### A 大学から動物園への寄与

- 1) 動物園が保有する資料に関する知識の啓発  
確実な情報と研究にもとづいた正確な資料の提供、それにもとづく説明や講演  
所蔵する資料についての研究や調査、目録や解説書や案内書やデータベースの作成  
展示手法への助言や、飼育施設のデザインや設計の実践ないし助言
- 2) 動物に関わる自然科学および人文・社会科学の学問の蓄積の提供  
大学が所蔵する文献資料や電子化データベースの活用や利用
- 3) 職員のための教育活動  
飼育員等に自然の生息地を体験させる「フィールド体験」の企画と実践と現地指導  
獣医師や飼育員等の研究・教育活動の指導と支援
- 4) 来園者のための教育活動  
当該園の職員、および来園した引率教職員や社会教育指導者に対する、助言や援助  
講座や観察会などを通じた学習活動への参加、およびその企画や助言
- 5) 国内外への情報発信および他機関との連携  
インターネットを活用した動物園からの情報発信、とくに英語での国際的な情報発信  
海外の関連機関との連携および連絡、および海外からの訪問者に対する対応  
国内外の関連諸学会や研究者への橋渡し、他機関との共同研究の実践

### B 動物園から大学への寄与

- 1) 希少種資料や標本資料にかんする研究調査の機会賦与  
保有する国際希少種や国内希少種の学術研究への提供、遺体など標本資料の研究機会の提供
- 2) 一般教育および社会貢献の機会賦与  
大学の使命である研究・教育・社会（地域）貢献のうち、社会貢献および地域貢献の機会
- 3) 野生動物の飼育実践研究の機会賦与  
繁殖、健康統御、長寿、福祉や環境エンリッチメントなどの科学的実践研究の機会供与  
日常の飼育を通じて獣医師や飼育員が培ってきた実践経験を、研究者や学生が学ぶ機会
- 4) 施設の提供  
動物園という施設を大学との連携の場として位置づけたうえでの施設利用の機会付与  
動物園を運営する地方公共団体その他の機関が保有する施設の利用
- 5) 大学の保有しない新しい情報コンテンツの発信  
一般に大学附属の動物園はないので、動物園と大学の連携というユニークな情報発信が可能

## 各論：京都市動物園と京都大学との連携

京都は、「京都議定書」によって地球環境の保全を世界に訴えてきた「環境都市」である。日本文化の中心として1200年間に及ぶ歴史を刻んだ古都だが、現在の世界的知名度でいえば、「ワシントン条約（野生希少動植物種の保全）」と同様に、「キョウト・プロトコル」の知名度はきわめて高い。京都は山紫水明の地で、四囲を緑の山に囲まれている。あまり一般に知られていないが、日本は先進諸国の中で際立って緑が多い森林国である。全国土の約60%を森林が占める水と緑の国は、先進国の中に類例がない。京都は、その長い歴史において、自然に育まれた都市である。これからの世代に必須な「環境教育」を実践する中核的な場所になりうる。動物園は、そうした「野生への窓」と言えるだろう。

京都市動物園は、わずか約4ヘクタールだが、街の真ん中であって交通は至便である。京都大学ともきわめて近い。動物園の使命は、何よりもまず市民への環境教育の場である。さまざまな野生動物を飼育実践しながら、人間とそれ以外の生命がいかにこの地球上でともに暮らしているのかを、実感をもって教える場である。そもそも「動物園」というのが誤訳で、語源の「Zoological Garden」とは、正しくは「動物学園」である。動物園は「見世物小屋」であってはならない。「動物学の蓄積をもって環境教育をおこなう場所」として、動物園を位置づけるのが妥当だろう。

一方の京都大学は、「地球社会の調和ある共存」をその基本理念として掲げている。ノーベル賞やそれと同等なフィールズ賞・ハックスレイ賞・エディンバラ公賞などの受賞者を輩出してきた。文化勲章を霊長類学の確立によって受章した今西錦司は、京都大学の伝統である「フィールドワーク」という研究法の草分けであり、晩年、京都を拠点に「自然学」を提唱した。そうした流れを受けて、京都大学には、動物学だけでなく、霊長類研究所、生態学研究センター、フィールド科学教育研究センター、地域研究研究科・アフリカセンター、東南アジア研究所など、ユニークな知的蓄積がある。そうした伝統を発展的に継承して、2008年4月に、日本各地の動物園やサンクチュアリとの連携や、国内外の自然の生息地での野生動物保全研究を視野に入れて、「野生動物研究センター」を新たに発足させる。

「地球社会の調和ある共存」という京都大学の基本理念に基づいて、京都大学は、動物学を始めとした自然科学のみならず、人文学や社会科学を含めた広範な学問の蓄積を、動物園に提供する用意がある。京都市は、そうした京都大学の社会貢献（地域貢献）の意図に呼応して、子どもたちの将来にとって重要な環境教育に関する施策の実施について協力願いたい。両者の連携によって、京都市動物園に限らず、現状の日本の動物園が抱える共通課題を克服し、本来の語義どおりの「動物学園」としての機能をもたせる必要があるだろう。動物園で、ゾウと出会い、キリンと出会い、ゴリラと出会い、チンパンジーと出会って、その動物たちの大きさや力強さや賢さを実感し、彼等の住んでいる本来の自然の生息地に思いを馳せる。そうした子どもたちの感性と想像力を育むことによって、「自然」「いのち」「こころ」「人間」について考えさせる場として、動物園を位置づける必要があるだろう。

京都市の側からは、至近の課題として2つの貢献が期待される。市と大学との連携をすすめ動物園を「自然への窓」つまり環境教育の場と位置づける。そのためには、現在の京都市動物園の施設・設備をそうした目的に適ったものとするよう整備する必要があるだろう。現在、日本動物園水族館協会に加盟する約90の動物園が全国にあるが、ひと科3属（チンパンジー・ゴリラ・オランウータン）をもつ園はわずか6園しかない。千葉、豊橋、名古屋、神戸王子、福岡市、そして昨年までの京都である。京都市動物園の歴史と特徴を活かし、市民に、日本に、世界に、誇れるものを創る必要がある。

市の施設を、大学と動物園の連携事業のために供用する。動物学研究は、多様な試資料の網羅的収集と同義である。絶滅の危惧のある貴重な野生動物の骨格や組織やDNAを、次世代への遺産として体系的に保存収集する必要がある。欧米の動物園は、そうした観客の目にはふれない広大なバックヤードをもっている。そうした研究の深さを支えるために、施設面でも必要な協力をしていただきたい。

## 各論：東山動植物園と京都大学との連携

名古屋市は、「なごや環境首都宣言」、「名古屋市民のごみ革命」によって全国に先駆けてごみ減量に取り組み、最近では「生物多様性条約 COP10（コップテン）」の誘致活動によって、環境都市のモデルとなっている。平成 11 年 1 月には、渡り鳥の重要な飛来地である藤前干潟を、公共事業の中止という苦渋の決断をして保全した。また「自然の叢智」をテーマとした愛・地球博（2005 年日本国際博覧会）には、世界 121 カ国 4 国際機関が参加し、会期中 185 日間に 2200 万人が来場した。名古屋は、日本第 4 位の都市であり、中京圏経済の中心だが、その都市の中央部に「なごや東山の森」という 410 ヘクタールもの緑地帯が残されている。それはニューヨーク市のセントラルパーク 336 ヘクタールよりも広い。あまり一般に意識されないが、日本は先進諸国の中で類例がない例外的存在で、国土の約 60% が森林に覆われた「緑と水の国」である。日本は全世界平均の 2 倍の森林をもっている。その世界の森林が、年間約 800 万ヘクタール（日本の国土の約 1/4）という恐るべき速度で破壊されている。こうした自然と人間活動をいかに調和させていくかが、今まさに問われている。温室ガス効果による気候変動と地球温暖化、それに伴う動植物の絶滅による生物多様性の喪失、それらを人々が学ぶ場が動植物園であり、名古屋市はその世界的モデルとなるにふさわしい自然と文化の条件を備えている。

東山動植物園は、名古屋市民の憩いの場であり、誇りであり、そして環境教育の重要な場である。名古屋市では「東山動植物園再生プラン基本計画」（平成 19 年 6 月 14 日策定）を立案した。過去 70 年間にわたり市民に親しまれてきた東山動植物園を、「人と自然をつなぐ場」として位置づけた再生整備計画をもっている。自然に育まれた都市・名古屋において、これからの世代に必須な「環境教育」を実践する中核的な場所であり、動物園と植物園を一体として運営した「野生への窓」が、東山動植物園だといえるだろう。東山動植物園は、市街地中心部に隣接していて交通は至便である。周辺には図書館や大学等のある文化ゾーンでもある。そもそも動物園の使命は、何よりもまず市民への環境教育の場である。さまざまな野生動物を飼育実践しながら、人間とそれ以外の生命がいかにこの地球上でともに暮らしているのかを、実感をもって教える場である。「動物園」「見世物小屋」であってはならない。「物学の蓄積をもって環境教育をおこなう場所として期待されている

京都大学は、「地球社会の調和ある共存」をその基本理念として掲げている。ノーベル賞やそれと同等なフィールズ賞・ハックスレイ賞・エディンバラ公賞などの受賞者を輩出してきた。京都大学には、動物学・植物学だけでなく、霊長類研究所、生態学研究センター、フィールド科学教育研究センター、地域研究研究科・アフリカセンター、東南アジア研究所など、ユニークな知的蓄積がある。霊長類研究所は、創設以来 40 年間、愛知県犬山市に位置して、全国共同利用研究所として、人間を含めた動物群である霊長類の研究を推進してきた。1999 年には実験動物施設に「生命倫理領域」を全国に先駆けていち早く立ち上げ、動物福祉や環境エンリッチメント研究の日本の中核になっている。そうした伝統を継承して、2008 年 4 月には、国内外の自然の生息地での野生動物保全研究や、日本各地の動物園やサンクチュアリとの連携を視野に入れて、「野生動物研究センター（仮称）」を新たに発足させる。

「地球社会の調和ある共存」という京都大学の基本理念に基づいて、京都大学は、動物学を始めとした自然科学のみならず、人文学や社会科学を含めた広範な学問の蓄積を、動物園に提供する用意がある。名古屋市は、そうした京都大学の社会貢献の意図に呼応して、子どもたちの将来にとって重要な環境教育に関する施策の実施について協力願いたい。両者の連携によって、東山動植物園に限らず、現状の日本の動物園が抱える共通課題を克服し、本来の語義どおりの「動物学園」としての機能をもたせる必要があるだろう。動物園で、ゾウと出会い、キリンと出会い、ゴリラと出会い、チンパンジーと出会って、その動物たちの大きさや力強さや賢さを実感し、その匂いを嗅ぎ、その声に耳を澄ませ、アフリカやボルネオの森など、彼らの住んでいる本来の自然の生息地に思いを馳せる。そうした子どもたちの感性と想像力を育むことによって、「自然」「人間」「いのち」「こころ」について考えさせる場、「自然への窓」として、動物園を位置づける必要があるだろう。

## 京都大学野生動物研究センター憲章

(平成20年2月5日制定)

京都大学野生動物研究センターは、野生動物に関する教育研究をおこない、地球社会の調和ある共存に貢献することを目的とする。その具体的な課題は次の3点に要約される。

第1に、絶滅の危惧される野生動物を対象とした基礎研究を通じて、その自然の生息地での暮らしを守り、飼育下での健康と長寿をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める研究をおこなう。第2に、フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合して新たな学問領域を創生し、人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究を推進する。第3に、地域動物園や水族館等との協力により、実感を基盤とした環境教育を通じて、人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。

京都大学野生動物研究センター設置準備委員会

## The Declaration of Wildlife Research Center of Kyoto University

The Wildlife Research Center of Kyoto University aims to promote the scientific research and education on wild animals, and to contribute to the peaceful coexistence of living organisms on planet earth. The mission can be summarized in the following three points. First, the center should carry out basic research on endangered and threatened species of wild animals to promote their conservation in their natural habitat, to improve their health and welfare in captivity, and to encourage the fusion of scientific approaches to advance our understanding of human nature. Second, the center should integrate different areas of science to create new disciplines applicable to field settings and to encourage international collaboration for the symbiosis of humans and other living organisms. Third, in collaboration with zoos, sanctuaries, aquariums, museums, etc, the center should promote environmental education of youths by offering them unique experiences with nonhuman animals, and provide young people with a deep insight into nature including ourselves.

The organizing committee for the Wildlife Research Center